

令和4年度助成研究

《淨瑠璃寺吉祥天厨子絵》の現状模写

—板絵彩色における下地技法と描画の関係性の観点から—

可児 貴子 (東京藝術大学大学院)

1. 研究概要

板絵は壁画や柱絵など建造物の一部として描かれることが多い。そのため直接空気に触れ、温湿度などの影響も大きく、劣化しやすい状態にあるものがほとんどである。しかし本研究の対象作品である東京藝術大学蔵重要文化財《淨瑠璃寺吉祥天厨子絵》(以下、本厨子絵とする)は、扉が閉じられていたためか、制作から800年たった今も、非常に状態が良く残されている。多少の剥落や剥離はあるものの、基底材に大きな反りも見られず、制作当初を思わせる美しい描線や彩色を確認することができる。文化財の状態劣化は保存環境にも大きく影響されるが、同時にその作品の素材や下地の処理、表現技法等も保存性と大きく関係している。したがって本厨子絵に使われた素材や制作技法を解明することは、板絵と保存という観点でも非常に大きな意味を持つと言えるだろう。また、本作品を厨子絵として考えたとき、片面は厨子の内側となり、同時にもう片面は外側となるように、両面性は厨子絵における大きな特色であると言える。したがって本厨子絵の表現技法を考える上では、外側に当たる裏面の完成形も見据えつつ、両面を同時に制作する必要があると考えた。

そこで本研究では、本厨子絵の厨子背板である《弁財天及び四眷属像》の表裏両面の現状模写制作を通して、素材や制作手法について探究していくことを目的とした。

2. 原本について

重要文化財《淨瑠璃寺吉祥天厨子絵》のうち《弁財天及び四眷属像》

板絵着色、縦103.6cm×横62.1cm、東京藝術大学蔵

本厨子絵は淨瑠璃寺吉祥天立像を納める厨子の扉絵として、建暦2(1212)年に制作されたものである。明治期に厨子のすべての扉及び後壁は取り外されて寺外に流出し、明治22(1889)年に東京美術学校の購入するところとなり、現在は東京藝術大学の蔵品として重要文化財に指定されている。

厨子内部に描かれている「弁財天及び四眷属像」「四天王像」「梵釈二天像」はその図様から、南都に興った復古主義の影響が色濃く見られるが、諸尊の持物に宋時代の新様式が見受けられ、新旧様式を巧みに調和させた南都仏画の代表作と言える。¹

また、厨子扉外側に描かれた「竹雀図」は状態劣化のため今まであまり注目されてこなかったが、竹を模した縁から伸びる葉の表現は非常に美しく、本格的な花鳥画として最も

¹ 林温「旧淨瑠璃寺吉祥天厨子絵諸尊をめぐる問題」『佛教藝術』第169巻、毎日新聞、1986年

初期の優品とも捉えられる。また、木地に見られる木目は自然のものではなく、人の手によって墨で描かれたものであり、これは正倉院にも遺例がある仮作（げさく）の技法に通じ、本厨子絵の復古的表現のひとつと考えられる。

3. 制作技法の考察

(1) 基底材の選定

先行研究²では、基底材について杉と檜の両方の記載が見られ、どのような樹種が用いられたのか判然としない状態であった。また、これまで樹種について科学調査を行われた形跡は見当たらなかったことから、樹種同定調査を行う必要があると考えた。樹種同定調査には、サンプルをとり顕微鏡で細胞の配列や形を観察して判別する方法と、マイクロスコープで観察を行う非破壊の調査方法があるが、前者の方が確実である。しかし、本厨子絵は重要文化財に指定されており、非破壊が前提であることから、熟覧調査の際に後者のマイクロスコープによる簡易的な調査を行うこととした。その結果、檜と杉の細胞配列は元来非常に似通っており、簡易的な調査では断定することはできなかったが、年輪の幅や、色の特徴（早材と晩材の色のグラデーション）などから、後壁「弁財天及び四眷属像」は檜に、正面扉「梵天像」「帝釈天像」の2枚は杉に特徴が近いと思われた。後壁と扉部分の樹種が違う、あるいは別材を使用している可能性があり、本厨子絵の成り立ちについて一考する観点になりうるかもしれない。

また、過去の修理の際に撮影された本厨子絵のX線画像³や熟覧での目視調査により、基底材は柾目板を使用しており、目視で確認できる板目の模様は人の手によって墨で描かれている可能性が高いと判断した。

以上のことから、今回の調査では樹種の断定までには至らなかったが、模写では檜板の柾目材を使用することとした。

(2) 構造

平成22(2010)年、岡墨光堂での修理の際に撮影されたX線画像⁴から、本厨子絵は2枚の板を繋ぎ合わせて構成されており、縦に3枚の薄板が内部に嵌め込まれていることが確認できた。さらに、反り止めの割木が上下につき、各8本ずつ合計16本の和釘が垂直に打ち込まれていることが読み取れ、これらの得られた情報を基に同一構造で現状模写を制作することとした。

(3) 下地技法

基底材を安定させ、彩色と基底材の間をつなぐ木地固めの下地工程は、非常に重要である。しかしながら、本厨子絵の下地技法について特定が可能になるような科学調査は未だ

² 須藤和之「浄瑠璃寺吉祥天旧厨子絵—東京藝術大学大学美術館所蔵—の彩色技法及び図様に関する研究：厨子絵内面及び外面の想定復元模写を通じて」2010年

³ 岡墨光堂『修復=conservation 9-10』2014年

⁴ 前掲註3

行われておらず、たとえ調査が行われたとしても非破壊によるものでは断定することが難しいように思われた。というのも、厚い塗膜の中に何層も層が確認できるような作品と違って、本厨子絵のように木地を生かした表現ではかえって塗膜が確認しづらいからである。

これらのことから、本研究ではサンプルを用いて下地について考察することとした。膠(ドーサ)下地のサンプルと拭漆下地のサンプルを作成し、それぞれを比較検討した結果、拭漆下地の方が耐水性に優れ、堅牢な木地固めを行えることが判明した。さらに、それぞれのサンプルに白土を塗布し比較したところ、双方はじくようなことはなく白土を塗ることができた。拭漆下地は塗布した白土の表面に気泡が多くできてしまう傾向があったが、一度に塗布する量をごく薄くすることで対処することができた。

これらの検証を踏まえ、本研究の現状模写では拭漆下地を用いることとした。

(4) 描画

サンプル実験で白土層にドーサを引くと濡れ色になりやすかったため、薄いドーサを1回塗布した。

転写は下げおろしの手法を用いて行った。墨が白土地に滲まないように、墨の水分量に注意する必要があった。

描画材料は、先行研究⁵とX線画像、赤外線画像や目視の色味を踏まえ選別した。

4. 現状模写制作

現状模写を制作するにあたり、薄美濃紙を用いて上げ写しを行い、情報を写し取った。線描から彩色線、最後に汚れや剥落線などを拾うといったように、進め方に気を使いながら行った。外側の木目も墨で手書きされているため、墨線部分の上げ写しを行った。模写に用いる基底材は、上質な木曽檜の柾目板3枚を継ぎあわせて制作することにした。原本は2枚を継いで作られているが、幅のある上質な檜材が現在では入手困難だったため、致し方の無いことであった。構造や材の大きさは原本のX線透過画像を参照し、なるべく忠実に再現した〔図1〕。

基底材の準備が終わると、表裏同時に矢車で古色をつけた。ドーサをひき、厨子外側の面には木目を墨で描いた。生漆を樟脳油で薄め、布で拭き取るようにして両面に薄く塗布した。漆が完全に乾燥した後、ドーサを塗布した。はじめは水分を含むたびに動いていた基底材も、拭漆による木地固めを行ってから次第に反りが少なくなり、安定するようになった。

厨子内側の白土地は白土と黄土を10:1の割合で混ぜ、すり鉢でよく擦って膠でといたあと、粗いものから細かいものの順に10回塗り重ねた。刷毛に含ませる絵の具の量を調整し、ごく薄く重ねていくため、10回程度で木の地が透けなくなる感覚があり、ちょうど原本の白土層の厚みとも近似しているように見えた。

⁵ 河原由雄「板絵の光学的調査とその概報」『科学的手法による仏教美術の基礎調査研究』奈良国立博物館、1982年

その後、黄土と墨と弁柄と白土を少量ずつ混ぜ、原本に近い色味になるように地色を塗った。この時点で暗くなりすぎず、色味が黄色味や赤味に偏らないように注意した。線描は下げおろしの手法で転写を行った。白土地の表面は非常に滑らかであったため、線の表情が単調になりやすく、筆の置き方や運筆の速度に注意しながら線描きを行う必要があった。

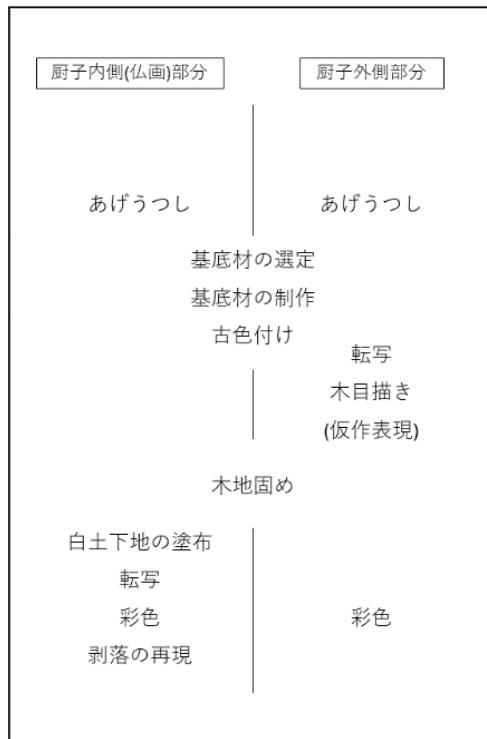
彩色には、鉛白、辰砂、朱、緑青、群青、金泥、黄土、代赭、白土、鉛丹、藤黄、墨を用いた [図 2] [図 3]。



[図 1] 基底材の制作



[図 2] 彩色・剥落の再現

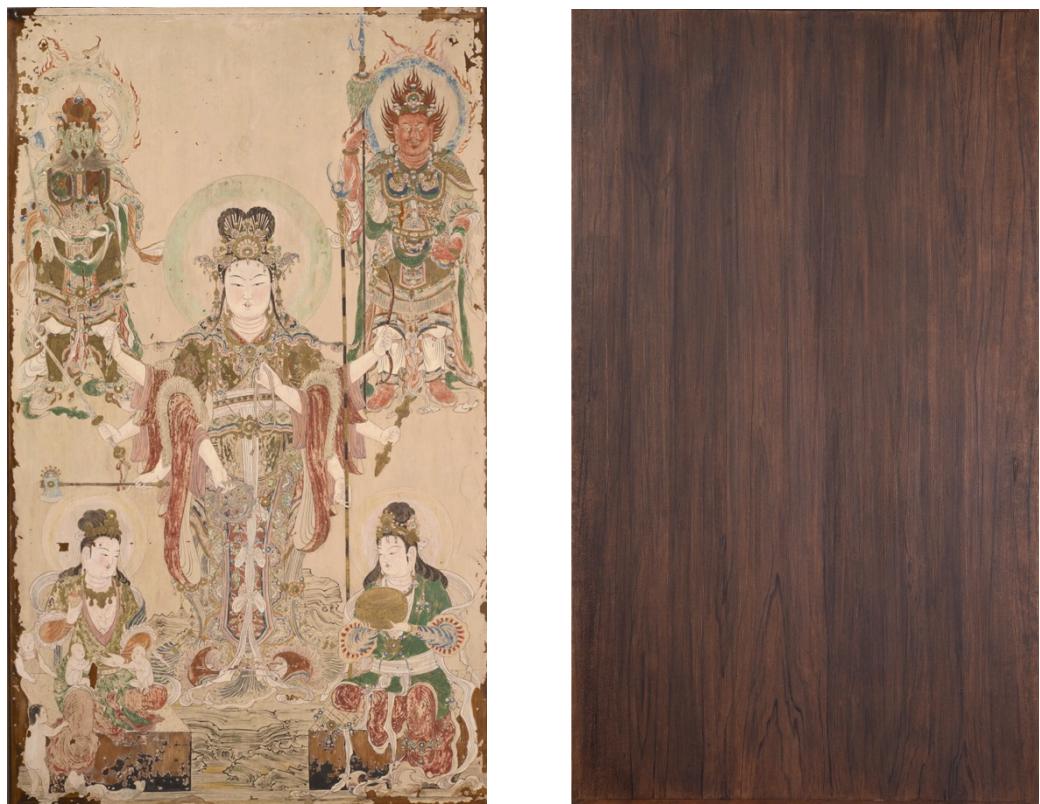


[図 3] 現状模写制作の主な工程

5. おわりに

本厨子絵の両面を同時に模写制作した[図 4]ことで、仏画部分のみを模写しただけでは得られなかつたような知見が多く得られた。例えば、制作手法や手順は片側を模写する場合とは自然と異なってくることや、板の変形は両面に同時に手を入れて地固めしていくことで、徐々に安定し反りもなくなっていくことなどである。

本研究を通して、板絵の新たな制作手順や手法の可能性を、実技的根拠を伴う形で提示することができたと考える。また、作品の制作技法が保存性にどのような影響を与えるのかという点に関しては、今回の模写作品が経年でどのように変化していくのかも合わせて検討していくべきであり、今後の持続的な検証が必要である。



〔図4〕「浄瑠璃寺吉祥天厨子絵」のうち「弁財天及び四眷属像」の現状模写(2023)

参考文献

- 奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』 第四巻、岩波書店、2001年
- 林温「旧淨瑠璃寺吉祥天厨子絵諸尊をめぐる問題」『佛教藝術』第169巻、毎日新聞、1986年
- 三浦定俊「淨瑠璃寺吉祥天厨子 模写板絵に関する保存科学的研究」1973年
- 須藤和之「淨瑠璃寺吉祥天旧厨子絵—東京藝術大学大学美術館所蔵—の彩色技法及び図様に関する研究：厨子絵内面及び外面の想定復元模写を通じて」2010年
- 岡墨光堂『修復=conservation 9-10』2014年
- 河原由雄「板絵の光学的調査とその概報」『科学的方法による仏教美術の基礎調査研究』奈良国立博物館、1982年